



# あそびしゃじ

清水エミ子

じしゃくの先にまばたきしない眼がすいついてしまったのではないかと思われるほど真剣に、じしゃくに釘がすいつくの、はずしはつけはずしはつけているN男。

全身の力をかわい親指と人さし指に集めてじしゃくをもちほそいくぎをすいあげて喜ぶH夫。やっと三本つながってさがったじしゃくの釘をとなりの子にみせようと声をかけたとたんとれてしまつてチュッと舌うちしてくやしがるA吉。釘の山の中にじしゃくをうずめていちにいのさんで取り出し、じしゃくにくつついた釘をくらべあっているS子。

子どもたちはひとりですべて数人で、あまり変化のない静的なじしゃくあそびのくりかえしをあきずに長時間続けている。そしてそれが単なるくり返しではなく、一回一回前と違った発見をしながらやりなおしている。そしてそのひとりひとりがいかにもその子らしい遊び方をする子と、そうでない子があることを強く感じさせられた。そしてその感情の表現にも、大きな差のある事に気がついた。

そこで私の幼稚園の他のクラスとさらに他の幼稚園（文京区）でも試みてもらい、具体的活動で比較してみても感情教育の教材としてのじしゃくあそびをたしかめてみた。

①全員にU字型じしゃく（20円の品）を与え、その遊び方と持続時間をみた（くぎとじしゃくだけ）。

②「もういい」と遊びをやめてじしゃくをもって来た時セムクリ

ップ（他のもの）を与えてその遊び方をみる。

①一斉に扱うのは一回だけにとどめ、その後は室内に常時そなえつけ、自由に遊べるようにしておき、その遊びの発展と感情表現をみた。

## △Ⅰ 一年保育児に与えた時の持続時間の違い▽

私の園では一年保育児を生活年令別に三学級に分けており、文京区の学級は四月から三月までいりまじっている学級である。

④文京区の学級 十六分～二十分（男児）、十二分～十八分（女児）男児は二十分あそんだ子が一番多く女児は十三分の子が一番多い。クリップは、人もほしがらず、使わなかった。

### ◎足立区関屋幼稚園

四月～八月生れの子 一番はじめにやめると言った子が二十五分だった。が次の活動の都合で全員三十分でやめさせてしまった。遊ばせておけばまだまだ続いたと思われる。

九月～十一月生れの子 一番最初にやめた子が二十五分、一番長くつづいた子が五十分で、三十分～四十分の間の子が大部分であった。クリップは使わなかった。

十一月～三月生れの子（私の学級） 一番はじめにやめたのが十八分で（文京区とにている）一番遅くまで続いたのが四十五分、男児（二十五分～三十五分の子が一番多い）。クリップを与えてから遊んだのが三十分～十五分。

・持続時間だけみても二学期の終り頃の一年保育児は変化の少ない静的活動のくりかえしを楽しんでいることがわかる。男女差が余りみられなかった事はみのがしてはならないと思われる。

## △Ⅱ 一斉活動での具体的あそび方とその発展▽

私の学級の遊び方を中心に眺めてみよう。

①なんのしかけもないのにどうしてくつつくのかねえ。

一番早くもうやめたともってきたK・S男（どんな活動でもくいつきは早いがきつであきっぽい子）じしゃくにすいつくことが不思議でじしゃくにかねのほうをつけてはじしゃくをながめまわしていた。釘の先にもう一本釘が偶然くつついたのをとび上ってびっくりし大声で「先生、ただの釘にもまた釘がつくんだよ、なんにもしかけがないけど」とさわいでいた。この子のあそび方はあまり変化はなくじしゃくの引力にまかせ偶然の吸いつきを楽しんでいた。

(f)じしゃくを机の上にのせ釘に近づけてくつつける。

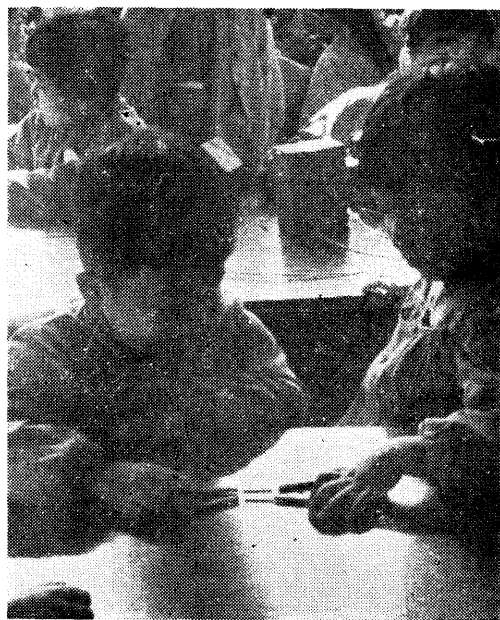
(g)釘を机の上におきじしゃくを上から近づける。

(h)すいついたじしゃくと釘を机の上で動かしてあそぶ。

・じしゃくの中にゆびをいれまわし「ぶーんひこうき」とぐるぐるまわす。

となりの子と並べて動かし「自動車競走ね」と机の上を行ったり来たりさせていた。

②ぼくはじめてやったよ、マホウってこんなのいうんじゃないの、



全身の力を指先に集め、人が違ったようにじしゃくのすいつきをながめたしかめ、そしておどろきの声をあげているT夫（私の学級では空想を楽しみながら子どもらしい理くつを言う子であり、独想にはいりやすく集団からはずれることがしばしばある子）。

・じしゃくを持ち、一、二回釘をすいつけて私をよび、「先生、地球の引力ってこういうのかもしいれないよ、きつと」と言って指先に力を入れて釘をもちじしゃくをすいつかせては、はずすときのていこうを何回もたしかめていた。

「スーパーマンはこういう力が体中にはいつているんだねきつと」



といいながらくぎを二本吸いつかせたりつなげたりして「はい、まほうです」と自分のハンケチを釘とじしゃくにかぶせて釘をすいつかせては楽しんでた。何か変ったことがあると「アハッ」と声をたてて喜んだりびっくりしたりしていた。

③鉄をかためるときにべたつかないのりをまぜてかためたのがじしゃくなんです。のりのはいつてるとこだけ白いじゃない。

釘を何本もつなげようとじしゃくをねかせたり立てたりしてくり返し、とうとう四本の釘をつなげ大よろこびのU・K雄（わがままで自分勝手に集団からはずれやすい。勝気でけんかなどどんなにや

られても涙をださないでがんばる。

・机の上においた釘をまず10本ほど独占、「今ぼくがこれだけつけてみせるからね」とすずしい顔で釘をつけはじめたが思うようにつかないで口の中でフツフツ言い、となりの女兒のじしゃくと自分のをひたたくつとりかえ、またつけていた。そして「鉄をかためる時にべたつかない」と言っていた。

・じしゃくを手を持ち、くぎをたてにつなげる。

二本目をつなぐとき横にねてしまうかはずれてしまうので、だめになってしまふ。

・机の上にじしゃくをねかせ、くぎをつなげ、そつとおこしてみる。

しかし一本だけがついてきてあとはみんなはずれてしまふ。

これを何回かやりなおし「ちえっだめだー」と舌うちしていたが、そのうちくぎを少しかさねてくつつけることを考えだしやってみた。二本ずつついた。ブランブランゆれるのをみて「アハッ」と声をだして笑い「やめようと思った時くつついたよ、ブランブラになるのをやめればいいよ」と今度は横と



たてを交互にやってみていた。しかしこれは釘の先がほそくなっているためよくつかない。そこでセロテープを持ち出して来てとなりの子に笑われてやめてしまった。テレかくしも手つだつてじしゃくを机の上をすべらせ「汽車だもの」と急に動かした拍子に、はずれたのこりの釘が丁字型にくつついたのをみて「ひこうきにしよう」といってとなりや前の男の



子たちのじしゃくにつけたり、かきまわしたりした。「ぶーんジェット機」というと、同じ机の男の子たちもまねて思い思いにひこうきを作って戦争ごっこがはじまった。そのうちU・K雄が「はじめにくつついてる釘がとれたひこうきは故障でまけなのね」とみんながむしやらにぶつけるひこうきから、釘がとれないように、手の動かし方をかげんしたり釘のすいつけ方を真けんに吟味したりしてあそんでいた(七分〇九分づいていた)。いつものU・K雄だったら自分からぬけていってしまうのに遊びをリードしていたのはおどろいた。

④僕の指一本とじしゃくの力と力くらべだ。

U・K雄たちの遊びをみていてなんの気なしに人さし指をつっこんでじしゃくをまわしていたら、じしゃくから釘がはずれてポタリとおちたのをみていたN・Y男(いつでも人のまねしかできない子。考えようとせず人のあとにくつついている子)。

・「じしゃくったら鉄のくせに僕の指一本にまけているの」といいながら四、五回くり返していた。

・くぎのつけ方によってなかなかおちない事を発見、いきおいよくまわしていた。O・U男が「なにやってるの」と声をかけると、今までなら何も答えずスッとどこかへいってしまっていたN・Y男が「空とぶ円盤」といった。私は思わず近よって「円ばん、すごいきおいね」というと「うんO・Uちゃん一しょにやる?」といって二人で何回も何回もくり返し、しまいに机の上に白ぼくで地図をか

き、その上をとばしていた。その顔はいままでみたこともない笑顔だったし全身を小おどりさせてあそんでいた。

⑤じしゃくっていうことをきかない。

あまり器用でない指先で一生懸命二本の釘をくつつけていたK・Y子（何でもやりたいけれど思うようにできず、何回かやり直し、しまいに放棄してしまふねばりのない子）。

・二本の釘とじしゃくに顔をくつつけて何かしているの近よってみるとすいついた釘を横にしたりたてにしたりとったりつけたりしている。私が近づいたのに気づくと「先生じしゃくも釘もいうことをきかないの」という。私が「どうして？」ときくと「こつちむけにしようとするどビシャッとくつついてとろうと思うとはずれないもの」という。このへんで「やめた」というかと思っていると、

・「先生くぎで顔ができた。笑った顔だよ。そこからこれはおこりかおねえー」

そして鉄ぼうだよ ゆうらんせんだよと言ってきたのにはおどろいた。この遊びは四月〜八月生れの学級にもみられたがひげ、ばってん、手でもってゆらゆらさせ空中ブランコと名づけていた。

⑥ちようちようができるわよ、ほら。

組にしようかと誘われて近よせたじしゃくが、ビシャッとくつついたので大よろこびのY・K枝（何をやるにも皆とテンボが一つお

くれている子、そして遅れすぎると泣いてごまかし放棄してしまいがちな子）。

・誘われてうれしそうに手でじしゃくを動かした瞬間、じしゃくが友だちのじしゃくにビシャッとくつついたので「ついちゃった」と喜び、力をいれてはなし、また友だちのに近よせていた。Y

・K枝が自分の方から先に行動をおこしていたのにはおどろいた。友だちが「釘より力が強くつくね」と声をかけると「ちようちようができたわよ、ほら」と机の上を動かしていた。友だちがもっていた釘をじしゃくの間にいれるのを見て自分のもいれた。「大きいちようちよだね」という。

・それを三回くり返し今度は釘でひげをつけ「本ものになってきたね」とよろこんでいた。

この時Y・K枝は、友だちのテンボにあわすことを通りすぎて彼女がほんのわずかではあるがリードしていたのにはおどろいた。この遊びも四月〜八月生れの学級にもみられたが、汽車にして机の上をはしらせていた。

⑦どつちがいつぱいくつした。

釘の山の中にじしゃくをうめてはそつとひきだし、釘のかずをかぞえていた。回を重ねるたびに目を輝かせ真剣に山の中からじしゃくを取り出していたT・K子（いつもがさつだが一つのことに熱中すると創意ある遊びをする）。

・まず、じしゃくで次々に釘をくつつけてははずしていたが、しま

いにじしゃくを机の上におき上から釘をたくさんおとし、じしゃくをかくしてしまい、それからそっと取り出し釘がいくつついているか、かぞえていた。

六、七回やっているうちにじしゃくにねらっておとすようになった。

・それをみていた他の幼児も釘をつかんで来てやりはじめた。がT・K子にはなかなかかわない。「T・Kちゃんうまいね」といわれ、それがとてもうれしかったらしく「どっちがいっぱいくつuitた？」と歌のようにいって喜んでいた。そして「考えておとすんだよ。ふといのとか、ほそいのとか、ちいさいのとかって順番にやるんだよ」と何回もくり返してやりながら自分なりに学んだ方法を友だちに教えていた。この時の目の輝きと全身に力をいれた真剣さには驚いた。

⑧そんならこういうのやる。

くぎの山をはじから一本ずつすいつけてくずしていったT・K子とくぎの山の中にじしゃくをうめるあそびをしていたH・T男はまけつづけのくやしきから、何とかちがう方法でなければT・K子をまかせないと考え、苦しまぎれにしんけんに発見した山くずし遊びなのだ。

(H・T男は落着きがなく、いまここにいたと思うと向うにいるし、これをやっていると思うともう違うことをして、何ひとつまとまって遊ぶことができない子。)

・「一個ずつしかとっちゃいけないんだよ」と山のすその方からそっとすいつけていたT・H男はそれをみて、じしゃくを近づけたが二本三本一度についてきてしまい「あーあ」といいながらやり直している。H・T男は「ほらね、こっちは僕のが上手だね」とうれしそうに自信を取り戻し「あのね、そっとそっとやるんだよ」といい「山のでっぺんだってそっとやればこれだけつくんだよ」ととくいそうにやっていた。H・T男がこんなに長時間一か所にいたことは珍らしい。その上真剣に一つの遊びをしたことに驚いた。

⑨くぎつてあまったれでひとりでもんなかあるけなくてすぐよっかつちゃう

じしゃくに顔をくつつけるようにして一本のくぎをおいかけている。じしゃくの中央に釘をおいては、じしゃくをそっと動かしている。A・A子(ややむらのある子だが一つの事に熱中する子で、あり一人でこつこつたしかめる子)。一本の釘とじしゃくで何かごちよごちよやっていた。近寄るとじしゃくの中央に釘をおき何とかくつつけずに動かしたいという。

「先生やってみてよ」というので私がやってみたが動いてこない。ちょっと右か左にじしゃくがカタよると、ピシャッとくつついてしまい、くぎは動かすことはできなかった。それをみて「うごかないね、釘つてあまったれだね。釘つてすぐよっかつてくついちやうね」といいながらそれでも何回もくり返しやっていた。そして今度は、「机の下じゃ動かない」机の上にくぎをのせ机の下で

じしゃくを動かしてみても「やっぱりだめだ、くぎってだだっ子だね」といい、じしゃくをもって近くの友だちのをながめに歩いていた。

#### ⑩じしゃくって電波だよ。

何気なくじしゃくを持った手を釘に近よせてそっとあげた時、机の上においた釘が立ちあがってボトンと落ちたのを見て、驚きと発見のよろこびで近くの友だちに説明してあるいたＴ・Ｏ夫。

（新しい活動に対してはおくびようだが、何回か一人でこつこつくり返したためし、自信がつくとそれを土台にいろいろな遊び方を考えてあそびはじめる子。）

・じしゃくと四〇五本の釘でついたりとなったりしていた。

・そして釘のつき方の変化を眺めて楽しんでた。

・はずした釘を机の上におき、じしゃくを持った手を上にあげながら、ひょっと、釘をみるとじしゃくから一cmぐらいはなれて五寸釘が立ちあがっていた。はっと息をのんだとたん「ぼとん」と釘は机の上に倒れてしまった。瞬間自分の目をうたがっていたようだったが、さっそくじしゃくを釘に近づけてひっぱりあげていた。はじめはじしゃくが高すぎて立たず、近よせすぎてびしゃつとすいついてしまったりしていたが、

・七、八回やるうちに少しもちあがってたおれたり、すいついたりするようになった。そして、そのたびに「あれ」「ウーン」とくやしそうな声を立てていたが目は釘とじしゃくにすいついていた。

「ほんの少しだけはならせればいいんだけど手がいうことかないんだな」と、ひとり言をいいながら左手で右手を押えてじしゃくを近づけていた。

・そしてついに釘をじしゃくでくるくるうごかすことに成功した。そしてその時、彼の口から「じしゃくって電波だよ」と思わずとび出した。しかし、だれもそれに反応しなかった。すると「ぼくのいいよ」と近くの友だちの目の前でやってみせた。

このあそびは次々にまねされたが根気のある子だけが成功し、あきやすくねばりのない子は「ぼくのじしゃくには電波はないよ」とやめていった。



そして、成功した子どもだけで釘立て競争がはじめられた。このあそびは九月と十一月生れの学級では、三本を一ぺんに立て、じしゃくをはなすと、しばらく立っているのをふしぎがっていた。

#### ⑪もちあげようと思ったらハイオリンになった。

釘立てをやってみようと一生懸命くり返していたＯ・Ｗ介が失敗から発見したあそび。

（何をやるのもおそく無口で、一学期間は集団からはみだしがちで何をやるのもびりだった。運動神経がにぶい。二学期になり同じ傾向の友だちが二、三名でき、活動もめだたなくなってきたが、仕事

に對してねばりのない子。)

・T・O夫の釘立てあそびをみて、七く八回まねていた。

私はめずらしいなと思ひながら眺めていた。

・手先があまり器用でないため近づけすぎたり、はなしすぎたりで一回も成功しなかった。そのうち、すいついた釘が片方に斜めについて五ミリ位すべって動いた。

・それをみて前にすわっていた友だちに「もちあげようと思ったらバイオリンになったよ」と鼻さきに出してみせていた。それからじしゃくを胸の上にもちあげて、すいついた釘をななめに動かして「バイオリン、バイオリン」とやっていた。前の友だちが先生O・Wちゃん バイオリンだって、おもしろいね」とまねしていた。

入園以來O・W介自身からのあそびははじめてといつてもよいほどめずらしかった。

このあそびは四月く八月生れの学級でも単独でみられた。そして同じ型のじしゃくあそびを鉄砲・機関銃と名づけてうちあいをしてあそんだが、私の学級では鉄砲類には一人もしなかった。

⑫じしゃくでもボーリングができるね。



じしゃくを机の上におき、その上に釘の頭をつけて釘を立てた。人さし指で左右に動かしていた。そして「ボーリングになるかな」とつぶやいてはいろいろの所に釘を立てていたK・T男。

(末っ子と鼻の悪さが手伝って、一つのあそびを自分でまとめてあ

そべない子。)

・しばらく釘をつけたりはずしたりしてややあきた時、何気なく置いたじしゃくに釘をつけてみて立ったので、うれしくなってまたあそびだした。

・そして近くの友だちにも釘を立てさせ、チリ紙をまるめて机の端から端へころがしてあてていたが、チリ紙ではなかなか倒れないので、友だちが庭から小石を拾ってきてチリ紙に包んでころがして当てる。すると釘が倒れてじしゃくからはなれた。それを見て庭にとんでいき、石を拾って来て紙に包まず石だけで当てる。三回目によつと当って、二本釘が落ちた。とびあがってよろこび、近くにいた女の子に黒板に点数表を作らせて10分ぐらいいもあそんだ。

⑬めい中ごっこ

この時近くでみていた女兒、机の上においたじしゃくに上から釘をおとして釘を立てることをやっていた。四く五名の女兒が仲間に入り「めい中ごっこね」とはしゃぎながらやっていた。そして、そのうちの一人の女兒が「あかい所はめい中してもつかないね」と言っていた。―遊びから科学的発見ができる―

⑭調子いいとよくころがるよ、練習すると、ながくてできるようになるよ。

自分の座席にきちんとすわったまま、一本の釘で七く八分あそんでいたが、じしゃくと釘を持って私のところに来て、机の上に釘をおき、じしゃくを近よせて左右にそつと動かした。すると机の上の



釘もじしゃくにつれて動いた。そして「ほらね」と私の顔を見あげたM・N子（5人姉妹の中間子で上と下からやられているため何かにつけてひがみっぽい子。共同で使う教材なども手をださずにいて、あとで「みんなが使ってたしの分なくなった」と言ってきたり、私に対して自分の要求をはっきり言わず口の中でぐちゃぐちゃ言っている子）

・あそびはじめは二本の釘とじしゃくでつけたりはずしたりしていた。そしてグループの友だちがいろいろ歓声をあげて喜こんだり、発見したりしてあそんでいても、一人グループからはみだしてあそんでいた。私は「またはじまった」と思ってみていた。しばらくすると釘とじしゃくを持って来て、釘を動かしてみせてくれた。そのうれしそうな顔にみとれていると他のグループの机の上で釘を動かしながら「調子がいいとよくがるよ、これね、練習するとながーくできるようになるよ」とだれに言うことなく言いながらやっている。それをみていた他のグループの子どもたちも一せいにやってみはじめた。なかなかうまくゆかず、すいついてしまつて「だめだ、M・N子ちゃんもう一回やってみない」とアンコールされてまたしてもにっこりして「このぐらいがいいのよ、ねえー」と言つて素直にやってみせ、「先生練習すればできるよね」と大きな声で大分はなれた私に声をかけた。それからM・N子は二、三か所机をまわつてやってみせて、室の中をスキップしたり、うたを口ずさんだりしていた。

#### ⑮ ぼくらは松戸競輪だよ。

M・N子に釘ころがしを教えてもらった男児名が机の端に並んで「よいいどん」と競争しながら「競輪なのね、ぼくらは松戸の競輪だよ」と言いながら、七、八分やっていた。そのうちに五、六名がかわるがわる交代して競争していた。

このあそびは四、八月生れの学級でも同じ方法であそんだが自動車競争と名づけ、おまわりさんや交通信号が書かれてあそばされていた。

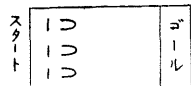
#### ⑯ 画用紙のうしろからでもくつついて動くね。

あそびはじめて十分後に、「画用紙使ってもいい」と言ってきたH・K雄。「どうぞ」と言うと「この上でやってみるんだよ」と言つて席にもどった。

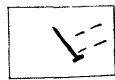
（あそびは雑だが長時間あそびがつづく子、一人でも多人数でもどちらでも適当にあそびを発展させる子。）

・机にもどり画用紙に釘をのせ下からじしゃくを当てようとするが紙が坂になって釘がころがって落ちてしまう。五、六回根気強くくり返していたが、うまくゆかないので、

・向かいがわの子に「もつてて」と頼み、紙をもちあげてもらつて、釘の下にじしゃくを当てて釘を動かした。「画用紙のうらからでもくつついて動くね」とうれしそう。そして二人で交代で何回かやった。そのうち向かいがわの子の画用紙を持っていた手がすべっ



て、紙が下にひらりとおりた。その時、くぎはじしゃくにびつちりついていたため落ちなかった。するとH・K雄は「ちょうちよ」と言って画用紙をひらひらさせた、向かいの子にもやるようにすすめ、二人で室中「ちょうちよ」をうたいながらまわっていた。



・つぎに席について向かいの子が「もうやめた」と言ったのでしばらくボツンとすわっていたが、そのうち紙の四すみを折り、箱のふたのようにして、一人でかみの裏から釘を動かしはじめた。「ひとりでできた」と私にみせた。

・その時、私のそばにいたA・M男が「H・K雄ちゃん相撲やろうぜ」と言って自分の釘を画用紙の中にほうり込み、下からじしゃくをつけて動かした。するとH・K雄は「そんなら土俵かかなきゃ」と土俵をかけた。それから五く六分すもうあそびをやっていた、そしてH・K雄とA・M男は室の中をあっちこっちして挑戦者をつつてすもうしていた。

このあそびは四く八月生れの学級では十三分後に紙をほしがり、紙の隅に釘をのせ、片手で紙をもちあげ、坂をつくり、片すみのじしゃくに釘をすいつかせていた。

九く十一月生れの学級でも紙をつかってあそび、紙の下からくつつくのをふしぎがり、「じしゃくの力がくつついているんだよ」と言っていた。この学級はすもうあそびが一番流行したらしい。私の学級では、もういいと言って来た子にクリップをみせて「これがあ

るけどあそびない」ときそってみた。クリップではただ長くつなげるあそびしかおこなわれなかった。

以上が私の園の三学級の一齐に行なったじしゃくあそびの流れと子どものようすです。私の学級（十一く三月生れまでの学級）ではまたやりたいと言うので常時じしゃくを二十こほど保育室においてみて自由あそびの時間に使えるようにした。

### Ⅲ 自由あそびの時のじしゃくあそびの発展

#### ① 円盤あそび

朝登園するなり、室にかかっているじしゃくをみつけ「まるくなつたはりがねちょうだい」とH・T男が言ってきた。私がクリップの箱を渡すと「五つちょうだい」と言って、机の上のせ上からすいあげていた。そして「円ばんだよ」といいながらあそんでいた。



#### ② すもうやろう。

H・T男のあそびをみていたA・M男が「そうだ」と言って画用紙を出し、四すみを折り、かごをつくりクリップを入れ、下から動かしてみて、クリップの中を立てて近くにいたH・Y雄の手をひっぱって「すもうやろう」ときそいクリップの中をおこして立てたものを渡して「こうやるの」とやり方を教え、すもうあそびをやっていた。登園して来た男児七く八名がまねして、組を作っすすもうあそびをやっていた。



しかし、大半は釘をつけたりとったり  
することを一人で楽しんでた

③お池を作ろうよ、それでアヒル泳かす  
のよ。

クリップのすもうを見ていたH・N子、  
近くにいたA・A子に「お池作ろうよ。

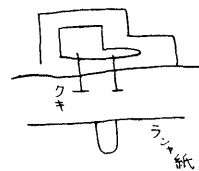
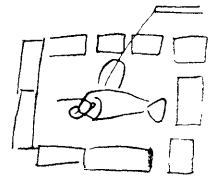
それでアヒル泳がすのよ」と言ってクリ

ップを六く七こ取りに来た。A・A子は画用紙に水色のクレヨンで  
ぬって池をつくった。その上にクリップの中をおこしたのをのせ二  
人で下からじしゃくを当てて動かしていた。それをみてまたA・N  
男が「アヒルの泳ぎ競争しようよ」とA・A子のグループにきて競  
争をはじめていた。

④魚つり作っただよ。

A・A子のアヒルを少しはなれた所でみていたA・O子が画用紙  
に何かかいてクリップをもらいにやって来  
て、「これに糊つけてもいい」ときいた。

「どうぞ」と言うとう座席にもどり何やらやっ  
ていたが、しばらくして「魚つり作っただ  
よ、ほら釣れるでしょ」とみせに来た。大小  
四・五匹作ってかわるがわる吸いつけてもち  
あげていた。これを見て、U・K雄が棒をほ  
しがつたので割りばしを与えると、ひももく



れと言う。そしてひもの先にじしゃくをつけてA・O子のところへ  
行き、「やらして」と頼んで魚を釣った。これをみて四、五名の男児  
もつり竿を作った。積木で池を作り積木の外から釣っていた。その  
うちA・O子は園庭に行ってしまった。魚も十匹にふえていた。

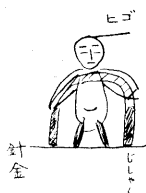
このあそびのあった次の日からこの魚釣りにヒントを得たあそび  
が多くみられた。トンホ取り、セミ取り、バツタ取り、チョウチョ  
取りがはじまった。

次に現れたのが自動車、二枚合せに切った自動車の間にくぎをは  
さみ、紙の下から動かそうとしていたが、頭が重く、なかなか立た  
ずに苦労していた。

⑤機械人形を作る。

自動車が出来ないのでK・H男が「先生じしゃくを紙の中に入れ  
てもいい、あとで出すから」と言ってきた。「どうぞ」と言うとき、  
「機械人形作るよ」と言って二枚合せにした紙で人間を作り、間  
にじしゃくをはさんでセロテープで留めた。そして机の上に釘を並

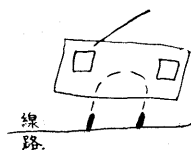
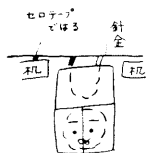
べてそこに立てようとした。が釘が動いてしまうのですぐころがる。そこで釘をセロテープで机の上にとめた。そして人間を立てたがセロテープの上はすいつきが悪くやはり倒れる。私に「セメグインちようだい」と言うので「何にするの」と聞くと「釘をくつつけるの」と言う。そこで説明を聞いてから針金を出してみた。針金を机にはりつけて人間を立てていた。しばらくは立つがすぐころぶ。そ



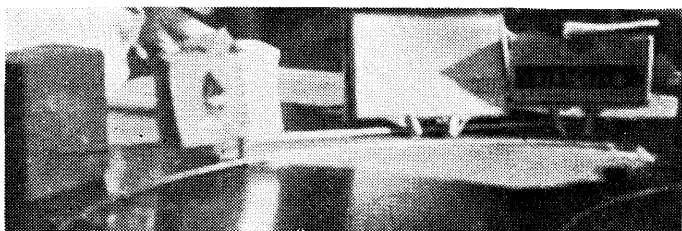
こで人間の頭にヒゴ竹をくつつけてその先をもって針金の上を歩かせていた。

#### ⑥ ケーブルカー

針金を出したためにI・K夫はビスの空箱の中にじしゃくを入れ、ケーブルカーを作って机と机に針金をさしわたしてそこにつるした。じ



しゃくの足の出し方でよく吸いついたり、すぐはずれたりするので大分根気強くやりなおしていた。これを見ていたU・O雄やH・A



男たちは、机の上に針金の線路をつくり（切りかえや駅や車庫や信号）、空箱で乗りものをつくって汽車ごっこをしていた。汽車、電車、トローリーが作られ、そのわきを人間も歩かせていた。針金とじしゃくの引き合う力の抵抗を手でたしかめながら動かしていた。おもちゃの自動車のうしろにひもでじしゃくをつないで釘をまいてすいつけていた子や室の中の所々の金具にすいつけてつく物とつかないものをたしかめたりしていたが、砂場には一人も持っていないかった。

以上が一斉に行なったじしゃくあそびと自由あそびで行なったあそびのあらましですが、秋から冬にかけてのじしゃくあそびを経験してみても、子どもたちからいろいろな問題を投げかけられているのを強く強く感じたのです。

・まず第一に私たちのもっている保育概念の不確かさです。今までのじしゃくあそびを反省してみると、①魚釣りのためのじしゃくであり、②金にすいついたものとかかないものをたしかめさせるためのものにすぎなかったようです。そして、秋のおわりから冬のはじめに適した自然の活動をしたと決めてまんぞくしてしまっていたのではないのでしょうか。

前にあげた事例でもわかるように、子どもたちは一回の経験をもとに自分であそびを広げていくし、あそびがこれで終りということなしに発展しているこのことでも、今までのじしゃくあそび

ははっきり反省させられました。

・個人でできる静的あそびのくり返しを驚くほど楽しんでいる。そしてそのくり返しがグループあそびに発展していくことを知らされたのです。私たちは幼児に与える童話はくり返しのある単純なものがよいなど知っていても、それは童話にしか活用していいのではないのでしょうか。他の活動にもこんなに必要だったことを目の前にみせられくり返しのつかない空洞に冷汗を感じます

・入園以来いろいろな形で問題のある子たちにいろいろな活動を通して、適切な指導をしようと一人ひとり真剣にみつめていたつもりでも、まだまだ確かめきれないものがあつたことを個々の子どもについて感じさせられたのです。

この子にこんな感情がこんな時にあらわれるのだな、と恥ずかしいながら二学期の終りごろになって気付かされた子たち、そして今までの観察とちがわず私を勇気づけてくれた子どもなど、それぞれ感情の表現に大きな差のあることを知らされたのです。

・活動が雑であきっぽいK・S男のように動的な活動にぐいつきやすい子でも静的あそびのくり返しをたのしみ、味わってくれている（何のしかけもないのになんでつくのかね）。事例①。

・わがままで自分勝手な集団からはずれやすいU・K雄（事例③）の全身の力を指先にあつめて口を輝かせ、じしゃくと釘をみつめ途中でほうり出さずに根気よくくり返し成功のよろこびを味い、「アハッ」という声と笑いによるこびの感情をすなおに表わし、

それからいくつかのあそびに發展させている（鉄をかためる時にべたつかない糊を入れてかためたのか）。

・何でもやりたいけれど思うようにできず、放棄してしまうねばりのないK・Y子（事例⑤）。じしゃくに顔をくっつけてくり返していたが、くり返しの効果がその失敗から一つの発見をさせ、偶然のよろこびを味わい、くり返しによるねばり強さを経験することができた（じしゃくについていうこときかない）。

みんなのテンポよりおくられていたK・Y枝が、友だちのテンポに合すことはもちろん、ほんの短い時間でもあそびをリードする経験ができた（ちょうちょうができるわよ、ほら）。事例⑥。

・失敗の経験が劣等感としてのこらず、かえってはげましになり真剣に自分からあそびを作り出すとする努力に変ったH・T男（事例⑧）のように、落着かない子が長時間一か所で真剣にくり返しを確かめながらあそべた。この子を見ていて、私はじしゃくのようなくり返しのきくものであそびはあそび方と興味が一致した時に、人が変ったように落着き、發展することを知らされた。そして私たちが今までいかに教材を画的に与えていたかを反省させられた（そんならこういうのやれる）（持ち上げようと思ったらバイオリンになった）。

・くり返しによる偶然からの発見でグループの活動に積極的に入っていたK・T男、うれしさをかくしきれず、全身で動きだした（じしゃくでもボーリングできるね）。事例⑫。

・くり返しの効果でひねくれの気持ちやすなおな積極性とあそびのよろこびを味わうことができたM・N子（調子いいとよく転るよ）。事例⑭。

・自分でゆっくりくり返しながら確かめた活動は、あそびながら科学的発見をするし、思いがけない發展を子どもたちの中から引き出してくれることをいやというほど、自由あそびのじしゃくあそびで知らされたのです。

Aヒル・すもう・人間・乗物こっこのどの、あそび方をみても、子どもたちの中にある力強いエネルギーを感じるので。そして経験のくり返しによる成功・失敗の体験の必要性を感じ、失敗を積極的な活動に変えていく訓練をしなくてはいけないと反省させられました。そしてこれからも、子どもたちに子ども自身のやりなおしの可能な教材を選び、失敗のチャンスを多く与えて、失敗を積極的なものに変化させていかれる力をつけていこうと強く心に言いかけたのです。たとえばあきっぱい子はやりなおしのくり返しによって頑張ることのよろこびを感じて頑張れる子にしていきたいものです。

このような、感情の教育に必要な教材を、子どもとともにひとつもつという確かめていきたいと思っています。

訂正 4月号43頁「幼稚園は一代か」の執筆者は、青柳義智代、44頁上段13行目の清水福郎は清水福市の誤りにつき訂正します。